お菓子の家の魔女

宇能鴻一郎

お菓子の家の魔女
昭和四十五年十月二十八日第一刷発行
著　者＝宇能鴻一郎
発行者＝野間省一
発行所＝株式会社講談社
東京都文京区音羽二―十二―二十一　郵便番号一一二
電話東京九四二―一一一一大代表　振替東京三九三〇
印刷所＝東洋印刷株式会社
製本所＝株式会社若林製本
定　価＝六〇〇円
© Koichiro Uno 1970, Printed in Japan
落丁本・乱丁本はおとりかえいたします。

0093-124461-2253 (0)　(文1)

姫君を喰う話　5
かごめ唄の吾子　55
地獄の愛　87
お菓子の家の魔女　129
月と一寸法師　169
肉蓮華　211

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

お菓子の家の魔女

裝幀＝司　修

姫君を喰う話

1

食べるものに私は関心が深いけれども、かならずしも美食家ではない。打水をした粋な料亭で、凝った料理をほんの小量味わい、目を細め、芸者の酌に舌を鳴らすのは、むろん大好きである。けれどもそれと同じくらいに、たとえば煙のもうもうとたちこめる朝鮮料理屋で、香ばしく炙(あぶ)られてゼラチンが適当に溶け、ニタニタ、ギトギトする豚の足や、あたたかく柔らかい焼肉や、胡麻で味をつけ生卵をまぶした生肉刺身で、ビールを喉にほうり込むのも、好物なのである。要するに私は、美食と悪食(あくじき)をひっくるめた、貪食家なのであろう。

貪食家にふさわしく、私は冬には好んでモツ焼き屋に行く。モツ焼き屋といっても新鮮な、まだピクピク動いていそうな材料を使う店では値段も結構張るけれども、それだけのことは、たしかにある。モツには屠獣の栄養状態、健康状態、性別年齢性経験までが、脂の乗り工合や柔らかさや歯ごたえや味の濃淡にまで、複雑、微妙に影響するから、仕入れも仇やおろそかにはできぬのである。

屠殺場には私も見学に行ったことがあるが、品川の裏手の広大な施設で、近くに寄るとふしぎな臭いが漂う。獣医に診察され、吟味された牛がコンクリートの広い部屋に連れ出されると、ハンマーをかくし持った男が、いきなり眉間を一撃する。牛は四肢をちぢめて飛びあがり、地響き立てて倒れ、ピクピクと痙攣している。

頸動脈をすばやく切断し、あふれ出る血をバケツに受ける。腹を一文字に裂くと、まだ生きている色とりどりの内臓が、湯気を立ててあふれ出る。それを両手でかき出して、床の穴に落しこみ、牛の腹腔はたちまち空っぽになるのである。

内臓は一かたまりになったまま、コンクリートの滑り台をすべり落ちる。下にはゴム前掛にゴム手袋の小母さんたちが控えていて、すばやく腑わけをし、あるいは湯で洗って、背負い籠に入れる。その前ではすでに何十台もの、仕入れのオートバイや小型トラックがエンジンを鳴らして待っているのである。牛が引き込まれてから、ものの五、六分とは経たない素早さである。

いい店では、おそらく携帯冷蔵庫に入れて持ち帰るのであろう。そのまま店の大型冷蔵庫に入れておき、二、三時間後に客の顔を見てから、小切りして、串を打つ。だから宵の口の客は、まだ仮死状態の——細胞はピンピンして生きている——モツを食べることになる。美味いのは当然である。ステーキ用の牛肉は数日おいて適当に分解し、表面が黒ずんだころが食べごろなのだけれども、宵越しの内臓(もつ)だけは食べられない。あちこち飲みまわって、空腹を覚えて、午前二時、三時ごろに立ち寄ると、早くも味の落ちているものもある。ことに、刺身で食べる生の内臓(もつ)ほ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

ど、そうである。

その夜は、肝臓刺身（レバさし）や子袋刺身（こぶくろさし）が美味しく食べられたのだから、それほど遅い時間ではなかった、と思う。もっとも酔っ払っていて、味覚があいまいになっていた恐れはある。私は焼き鳥やモツ焼きには焼酎が一番あう、と思っているのだけれども、さいきんは新宿駅裏の安いモツ焼き屋でさえ、こんなものは置いていない。日本酒とかビールとかウイスキイ、あるいはジュース、コーラはあるけれども、……そもそもジュースやコーラでモツ焼きを喰う男がいたら、そいつの顔を見てみたいものだ、と思う。およそモツ焼きはアルコールが脂を溶かし、舌を洗うからおいしいので、もし酒が飲めなければ熱い番茶を、それも厭だという男には、石鹸水でも飲ませてやればいいのである。ジュース、コーラなどの女子供の飲みものでモツを喰うのは、モツに対する重大なる侮辱であり、その朝、貴い生命とともに内臓を提供してくれた牛や豚にも、申し訳が立たぬのではあるまいか。

脱線してしまったけれども、要するにさいきんのモツ焼き屋には、焼酎はない。しかし私のよく行く店には甲州葡萄酒というのを置いていて、これが甘くなく、さっぱりして、なかなか味が良い。しかし、飲みすぎると、どういうものか悪酔いする。その夜もかなり酒がまわっていて、右や左のおしゃべりや口論、ジュウジュウと脂の焦げる音や炭のパチパチ弾ぜる音、団扇のひびき、換気扇の低いうなり、

「ヘイッ、タン塩三丁」

「ヘイッ、お愛想」

と叫ぶ店員の声も、波の響きのように大きくなったり小さくなったりして聞えるのだった。煙が濛々と立ちこめるなかに、店員の白い上っ張りがチラチラとし、炭火の赤い色がほのめき、体はカッカと火照り、オーヴァーの前をひろげネクタイをゆるめているのだが、それでもまだ暑く、汗がひっきりなしに流れ……それがときどき、

「おう寒ッ」

と叫んで、オーヴァーの襟を立てた客が飛びこんでくるたびに、師走の風が吹き入って、さっと涼しくなる。煙も薄れ、前で焼きあがった肉を切っている店員が、はっきり見えてくる。この店は肉の大きいかたまりに串を打って焼いて、客の皿にのせてから切りわけるのである。こうすると中の肉汁が抜けたり乾いたりせず、口に入れると熱い豊饒な滋味が舌にも口腔にもひろがり、おもむろに奥歯で噛みしめると、液体がじゅっと音立ててほとばしり出るようで……私の皿にももう十数本、そうした内臓の串が並んでいるのである。

しかし私がいま、ガラスコップに入れた冷たい甲州葡萄酒をチビチビやりながらつついているのは、肝臓と、子袋の刺身である。フワフワした、濃厚な味の豆腐のような大脳もすてがたいし、心臓の刺身もさっぱりして美味しい。睾丸と大陰唇――土手と俗称するのであるが――の刺身は、赤黒くてくにゃくにゃして歯切れよく、ふしぎに似通った味がする。おそらく睾丸と大陰唇は発生学的には同じなのであろう、ということを味覚で実証する面白さはあるけれども、滋味

の点ではそれほど推奨に価するものではない。

何といってもまず新鮮な、切り口がピンと角張って立っている肝臓である。それが葱と生姜とレモンの輪切りを浮かべたタレに浸って、小鉢のなかで電燈に赤く輝いているのを見ると、それだけで生唾が湧く。口に入れて舌で押しつぶすと、生きて活動しているその細胞がひとつひとつ、新鮮な汁液を放ちつつ潰れてゆくのがわかり、薬味でアクセントをつけられた味わいがねっとりと舌の表面をおおいつくし、いくら唾液で洗っても、甲州葡萄酒を一口、ごくり、とやるまでは消えさらない。そのあとの空白のなかで、味わいの記憶にふけっているのがまた楽しいのである。

「らっしゃいっ」

と声がかかる。

「相済みません、おつめ願います。相済みません」

と命令されて、カウンターの奥につまった客から、不承々々腰を動かしてゆく。順送りにつめてゆくとふしぎなことに、だんだん隙間ができてきて……丁度私がつめたところで、一人分の腰掛けができてしまった。

ごつい体が、隣りに割りこんでくる。

「何にします」

「酒」

と、底力のある、錆びた声で言っている。私の肘が触れている、相手の脇腹が、声を出すたびに重々しく震えるのが判る。首をまげて、どんな男かを見るのも面倒である。それより男と私のあいだには、まだ半分以上残っている子袋の刺身が、置かれている。男が突き出しと間違えて喰ったり、店員に下げられたりしたら困るので、なるべくさりげなく、私は自分の前にひっぱりこむ。

「焼き物は何にします」

「タン塩、シロも塩」

お隣りさんは何でも好きなものを食うがいい。私はこのピンク色の、薄く輪切りにされた子宮を、また味わうことにしよう。輪切りの中心に小さな穴が開いていて歯ざわりも柔かいのは、処女の豚なのであろうか。日によってはやや硬く、中心の穴も大きく押しひらかれたものを、また押しちぢめたように襞が入っているのは、経産婦の豚に相違ない。だが、今日のは柔らかく、快よい歯ごたえで噛み切れて、肝臓とはまったく違った、さっぱりした味わいを口中にひろげてゆく。細かく切った葱を五つ六つつまんで口に入れるが、これは生臭みを消すためではなく、タレに浸った生葱じたいがまた美味くて、これだけでも十分に甲州葡萄酒の肴になるからである——。

隣りの男の前に、小さな琺瑯の薬罐に入った酒が置かれる。陽焼けした無骨な手がつるを取って、ガラスのコップにとく、とく、と、注ぐ。大腸と舌の塩焼きが運ばれる。男の手はそれを握り、横ぐわえにして、ぐい、と引き抜く。そのはずみに脇腹をこづかれて、私はとうとう、子宮

を味わうのを止めて、隣りに首をねじ曲げたのである。あたかも目前の炭火に脂がしたたり、煙が吹きよせてきて涙がにじみ、それとも酔っ払っているせいか、隣りの男ははじめは朦朧とした、白い塊りとして目に映ったのであった。

目鏡をあげ、ハンカチで曇りをおとして、また目にかけて、私はおどろいた。隣りに坐っているのは、師走だというのに素足に高下駄、黒い着物に袈裟をかけ、偈箱を膝に、天蓋をのけぞらせて顔の下半分を見せている、逞しげな大男である。髭は剃ってはいるが、もともと濃すぎる体質らしく、頑丈な顎から頬にかけて翳りができ、密生した切り株がはっきりと見えるのである。

しばらく私は、唖然として眺めていた。なにも私は、野暮は言わない。虚無僧が普化宗の僧だったのは昔のこと、いまは物乞いか尺八修業の手段で、生活が俗人とかわらなくなってきたことは知っている。しかし、せめてこの店にぐらいは、洋服を着てきたらどうなのだろう。

いくら寒いからって、ちょっと着かえてくるぐらいの、気のくばりはあってもよかろうではないか。

それにこの、傍若無人の食べかたはどうだろう。ピチャピチャと音を立て、大腸の切れはしを嚙みしめ、ぐい、とコップ酒をあおり、ふう、と、すさまじい息をつく。何とも恐れ入った、なまぐさ虚無僧である。

おまけに肱で私をぐいぐい突き、生ぐさい息を吐きかける。すっかり私は反感をもったので、相手が、

「ここの内臓はうまいですな。いつも新らしくて」
と、話しかけてきたときも、
「そうですか」
と、冷たく答えるにとどめておいた。
そして、横目で観察するのだが、相手はいっこうに参った様子もない。これくらいの応対で、自尊心をくじかれるような、繊細な神経は持ちあわせていない、と見える。ますます勢い猛に、塩焼きを乱杭歯でしごき、くちゃくちゃと音立てて顎を動かし、新鮮な汁液を吸いとっているのである。
どうもこの男は、気に喰わない。私は攻勢に出ることにした。はじめは皮肉と気づかれぬよう、じんわりと、遠まわしに言ってやろう。
「たしかに新しいですよここの店のは。いま召しあがっているタンにしても、そいつはまさに、舌ですな。ベロですな」
私はあかんべえをするように、長々と舌を出してみせたが、これは私もかなり酔っ払っていたからだろう。虚無僧はじろりと私の舌を見たが、別に感心した風もなく、またコップ酒をあおるのであった。
私は話をつづけることにした。
「どうですか、そのタンは、なめてみても嚙んでみても、女の舌と、まったく同じ舌ざわりじゃ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com